人間の福祉　第33号（2019）17～31

〈原著論文〉

伝え教え，そして受け止める営みとしての教育
―被爆した子どもに応答した大人として，そして，原爆を語り伝えた教師としての奥田貞子―※

村　上　美奈子※※

はじめに―体験とその継承

現在80代の私の両親が子どもだった頃，日本は愚かな戦争をしていた。私の父は，1945（昭和20）年７月の福井の空襲の際に，生まれ育った家が消失し，従兄弟や最も親しくしていた友人らを亡くしている。私の母は，命からがら大陸から引き揚げてきた。何かにつけて戦争体験を聞かされて育った子ども時代に私は，平和な時代に生まれて贅沢に暮らしていることがありがたいと同時に申し訳ないという思いにしばしば駆られた。

そんな私の子ども時代から30年以上の歳月が過ぎた今，戦争期を大人として生き抜いた私の祖父母の思いに想像を馳せるようになった。引き揚げてきてどこもかしこも焦土と化した祖国を見た時に祖父は何を思っていたのだろうか。私の両親が結婚する前に亡くなった祖父なので，もちろん会ったこともない祖父ではあるが，2011年の津波の被災地に眠る祖父の墓を震災後に頻繁に訪れるようになって，そんなことを考えるようになった。

そして，私の心の中でずっとくすぶっていた問いに向き合うタイミングが訪れた。その問いとは，自分すら経験していない戦争の愚かしさを哀しさを，どうやって子どもたちに伝えていけばよいのか，という問いである。

私は以前，養護学校および特別支援学校で８年間教諭をしていた。肢体不自由の学校で５年間，知的障害の学校で３年間勤務したが，特に肢体不自由の学校では，学校に通ってくる生徒の生き死にに直面することも何度もあった。そのような子どもたちと関わりながら，その本人と，そして家族と，どのような言葉をかけ合いながら毎日を過ごしていくべきなのか，どう関わってよいのか，とても悩むこともあった。

※ *Education as Teaching, Telling the facts by Teachers, and Receiving those by Students*
―Teiko Okuda, as an adult who cared the children in Hiroshima, and as a Teacher who told the Experiences of Hiroshima―

※※ Minako MURAKAMI　立正大学社会福祉学部社会福祉学科特任講師

キーワード：奥田貞子，絵本，原爆，平和教育

特別支援学校を退職後，大学での仕事を始める直前に発生した2011年の東日本大震災では，大学の授業開始が１ヶ月遅くなったことから，様々な報道に接して本当にそうすることがよいことなのかどうなのか逡巡しながらも震災翌月に初めて被災地に出向き，今なお継続して通っている。

被災地でボランティア等として活動している若い人たちと話す中で，特に震災直後の時期にしばしば耳にしたことは，「どんな言葉で，そしてどんな態度で接するかについて，これほどに神経を使ったことは今までになかった」という話であった。

ここ２，３年で，私は，「広島・長崎を語り継ぐ原爆絵本―『心のケア』とどう折り合いをつけるか―」，および，「原爆絵本リスト作成の歩み―広島・長崎を伝える絵本教材―」と題する研究ノートを本誌に発表した。その中で，計120点に及ぶ原爆絵本リストを作成し，また，原爆児童文学の先行研究を踏まえながら原爆絵本の表現について概観したり，全４期の時期区分の中にそれぞれの作品を位置づけたりした。本稿では，そのリストの中でも特に印象的な奥田貞子の作品について，また，奥田は，1960年から，山形にある全寮制のキリスト教の高校で家庭科教師および女子寮舎監として勤務をするようになったのであるが，そこでの教師としての姿や，２つの作品を絵本として出版するに至った過程について，様々な関係者からお話を伺ったことを踏まえて，「伝え教え，そして受け止める営みとしての教育」という視点から考察する。本稿をまとめるに当たり，私は，奥田が原爆投下直後の広島で，子どもたちとどんな出会いをし，関わりをし，その経験を学園でどのように語り，それがどんないきさつで書籍化されたのかを追った。そのことを通して，教師の語りがそれを聞いた一人の生徒をきっかけにどのようにして出版という社会的な営みにつながっていったのか，そのように生徒の心を動かしたものが何であったのかを問うた。

１　広島を体験した奥田

⑴　奥田の２冊の絵本

これまでに100冊以上の原爆絵本を手にして読んできた中で，最も心に訴えかけてきた数冊の絵本のうちの２冊の原作者は奥田であった。広島や長崎の原爆を伝える絵本は，激しく強く訴えかけてくるものか，あるいは，あまりの残忍さを絵においても言葉においてもカムフラージュしながら伝えようとする絵本が多い中で，奥田の絵本は，静かに，そして，力強く語りかけてくる内容であった。その二冊とは，以下である。

・『ルミちゃんの赤いリボン　一つだけとまったらかえってくるといったのに』奥田貞子・文／宮本忠夫・絵，ポプラ社，1983年

・『ケイコちゃんごめんね』奥田貞子・文／宮本忠夫・絵，ポプラ社，1983年

『ルミちゃんの赤いリボン』（※以下，『ルミ』）の内容は副題が暗示しているのであるが，原爆投下後のルミちゃんと奥田との関わりの中でのルミちゃんの様子と変化，そして，ルミちゃ

んを伴って被爆直後の広島でルミちゃんの両親を捜して回った，「ルミちゃんのおじさん」の苦悩が描かれている。すでに原爆について多くのことが語られて様々なエピソードを知っている現代の私たちにとっては，幼子を連れて被爆直後の広島を歩き回った時点で悪い予感が呼び起こされるのであるが，当時はそのようなことを考えもせずに入市被爆してしまった人たちが多かったのであろう。

この作品は，開隆堂から出版されている中学英語の教科書“SUNSHINE”の平成18年度版に，３年生の読み物教材として，‘A Red Ribbon’のタイトルで掲載されている。平成24年に新しい版の教科書が発行される前まで掲載されていたので，その教科書を使っていた中学校の中には独立学園の奥田に生徒たちの読後感想を送ってきたところもある。

『ケイコちゃんごめんね』（※以下，『ケイコ』）は，奥田が原爆投下後の８月８日に出会ったケイコちゃんという女の子と，名前も知り得ぬその兄，そして，その２人に対して力になれなかったことに関して，奥田が詫びる気持ちが描かれている。元々は，「待っていた兄と妹」という題だったこのエピソードでは，悲劇的な展開の中にも，奥田とその兄妹との心温まるやり取りがあり，子どもの笑顔と安らぎの瞬間さえも浮かんでくる。

絵本に描かれている奥田本人である「お姉さん」の姿も十分に優しい容姿で描かれていた。しかし，それにも増して，それら２つの物語も収められている奥田の著作『空が，赤く，焼けて―原爆で死にゆく子たちとの８日間―』小学館，2015年（以下，『空が，』）のカバーにある著者紹介欄の，広島に渡った頃の奥田の顔写真を見た時，奥田の絵本の中で読んだエピソードが頭に浮かんで，それらは肢体不自由の学校の先生方の笑顔や子どもとの接し方と重なるものがあると感じた。生命の危機にすらある子どもに寄り添い，笑顔にさせる，その姿にかつて私が職場で見てきた光景が重なり，とても共感を覚えた。奥田の笑顔の写真を見て，私は何か救われた気持ちになったのである。本当に悲惨な亡くなり方をしたこの兄妹だけれども，最期にこの優しい笑顔の「お姉さん」と関わることができたということを知って救いを覚えたのである。

これに関連して，『ケイコちゃん』に出てくるエピソードの中で特に印象的なのは，奥田が足りなくなった薬を取りに行くために，動けなくなった兄妹を置いて，自分の兄の子どもを探すための足場にしていた親戚の薬局までいったん戻ろうとするシーンである。少年は自分が妹のケイコを乗せて押してきた自転車を使うように奥田に勧める。奥田は，「自転車には乗れないけど，走るのは速いのよ」と言い，その返答に少年はニッコリ笑う。何のことはないやり取りかも知れないが，奥田の返答が少しユーモラスに感じられ，今にも命が消えそうな少年の笑みを引き出したこのやり取りにとても温かいものを感じる。

⑵　広島の原爆と奥田

それでは，奥田はどうして原爆投下直後の広島に居合わせたのか。そのことについては，『空が，』の，「はじめに」に記述がある。

奥田自身は，６日当日は「瀬戸内海の静かな島」にいたのであるが，病院の建物の中の，窓

から一メートルくらいの所にある椅子に腰掛けていて，注射を受けようとして腕をのばした時に「ピカッ！」と光ったという。60キロメートルも離れたその場所で，窓ガラスの壊れた穴の，その穴の形とまったく同じ形の火傷が右側の首にできて，ヒリヒリ，チクチク痛んだということである。そのうちに，広島が大変なことになったと村中がさわぎになり，肉親を探しに行く一団に参加することになった。７日の朝に出発して，昼頃には宇品港に着いた。原爆で半壊した祖母の薬局になんとかたどり着き，兄の２人の子どもを探していた８日間の間に出会った子どもたちの記録が，現在書籍化されている『空が,』である。子どもたちの最後の言葉や，死んでいく様子を書きとめたその日記を，「焼き捨ててしまいたい」と思いながら，山形の職場に移ってからも紙の菓子箱に入れて持っていたのであるが，学園の夕拝等で，広島での原爆体験として生徒たちに向けて読み上げるようになり，それが次章で示すように著書の発行につながっていく。

奥田は，広島に着いたその日は，「見るもの聞くもの，ただただこわくて，目をおおい耳をふさいで逃げまどいました」と証言しているのであるが，翌日からは傷ついた子どもたちに応答していくようになる。

奥田自身が探していた兄の子ども２人は，８日間探して会えなかったので，あきらめて島に帰ろうと思っていた時，奥田が立てておいた立て札を見たといって２人は帰還し，抱き合って再会を喜んでいる。その６年生の姉と４年生の弟は，６日朝に出かける途中の電車の中で爆音を聞いて田んぼに飛ばされ，火の海の広島がこわくて帰れなかった。14日になってようやく，知らない大人について歩いて来て立て札を見たのだという。

『空が』の奥付の著者略歴には，「1960年から晩年まで，山形県小国町の『基督教独立学園高等学校』教諭。」と書いてあった。私の大学院の後輩がそこで教員をしていて，キリスト教の関係者からは，「山奥にある全寮制の学校で，生徒も教師も質素な生活を送りながらとてもいい教育をしている」と聞いていた学校だった。

奥田が，どのようなことを思いながらその環境で後半生を送り，書籍化や絵本の出版に至ったのか知りたいと思い，2017年９月と12月に「基督教独立学園高等学校」（以下，「学園」）を訪ねた。

⑶　サバイバーズ・ギルト

学園での奥田と，絵本の出版に至る過程については次章で述べることにして，その前に，奥田の生涯にわたって影響を与えたであろう広島での出来事をここで確認しておきたい。

大きな災害や戦災で生き残った人たちの多くが，後ろめたさを抱くことがあり，それは，川口隆行編『〈原爆〉を読む文化事典』（青弓社，2017年）によれば，「サバイバーズ・ギルト」と称されることがある。井上ひさしの戯曲「父と暮せば」に代表されるその感覚は，広島や長崎の証言の中に多く現れているし（林　1995，p.87，等），また，2011年の津波の体験以降，子どもか大人かを問わず，多くの口から語られている（雁部2016，p.20，等）。

奥田の著書の中で奥田の思いが最も強く表現されているのは，『空が，』の中で，「お母さんとネンネした坊や」という題で告白されている体験の記録である。日記のように独白的に語られる他の章とは異なり，その章のみは，島で心配しているであろう奥田の母宛の手紙という形式で綴られている。

この章でもやはり，地獄絵図の中にあって，動かなくなった母が死んでいるということさえも分からずに心細く泣いている「坊や」に応答して，奥田は火傷だらけの坊やを抱え上げて寄り添いながら，坊やのニッコリ笑う笑顔を繰り返し引き出し，また，傷の治療もしている。熱でぐったりしてもいる坊やを，その本人が望むままに，亡くなった母親の傍らに穴を掘って寝かせ，顔の日除けを置いて，奥田は再び，どこを見ても恐ろしい風景の中を，兄の子どもたちを探してさまよい始める。ところが，その坊やの所に戻って来た時に，奥田は，思いもよらなかった帰結に直面することになる。奥田はそのことで自分を責め，「私の生涯の中でお父様が死んだ時よりも，弟が戦死した時よりも，強い悲しみとして残ります。そのために，私は生涯祈りつつ，謝り続けなくてはならないのです」（pp.55-56）と，心の叫びを吐露している。

学園での奥田のことを何人もの卒業生や学園の先生方から伺いながら，次章の注で紹介するような，仲よしの同僚の華子先生との交流の様子と共に，その華子先生とは対照的な性格，つまり，明るく朗らかな華子先生とは正反対に，重い影のようなものを抱え続けていたという印象が伝わってきたが，奥田自身も，同じく次章で紹介するテレビ番組の中でも，「広島で出会った子どもたちのことを思い出さなかった日はない」と語っていた。

2　独立学園での奥田

⑴　学園で語り始めた奥田

奥田は戦後，故郷である瀬戸内海に浮かぶ広島の島を離れ，山形の独立学園で教師をし，96歳でその生涯を閉じるまでそこで過ごした。どのようなきっかけで故郷から遠く離れた独立学園で働くことになったのか。

原爆投下の頃，奥田は，島の編み物教室で教えていた（『空が，』p.46）。奥田は1914年８月９日に，瀬戸内海に浮かぶ，現在では「とびしま海道」をたどって訪れることのできる，広島県の島の一つに生まれている。そして，『空が，』の「はじめに」で触れられているように，奥田は女学生時代を広島で過ごした。奥田が2011年７月に亡くなった際の「告別式次第」に載せられている「奥田貞子先生の記録」によると，奥田は1932年に女学校を卒業した後，1934年からは，兄が夕張に在住していたためか札幌の技芸専門学校で３年間学び，終戦直後に広島で３年間，さらにその後東京に出て３年間，それぞれドレスメーカー女学院で学んだいうことである。特に，今も品川の上大崎に校舎がある東京の名門ドレスメーカーでは，その才能を高く買われ，アシスタントに誘われもしていたという。中でも編み物が得意で，特別なデザインの編み方について特許も持っていたということだった。学園の卒業生に奥田についての思い出を伺った時

にも，「布にすいつくような手」をしていた，と，奥田の洋裁に対しての高い技術を回想していた。

奥田の指導を受けた卒業生たちは，「洋裁学校に来てしまったのか」とすら思うような厳しくも丁寧な指導が印象に残っているということである。見せていただいた卒業生の被服の授業のノートには，さらに高いレベルを目指すように励ますようなコメントが記入されていた。

奥田が独立学園で働くようになったのは，1960年の12月である。学園の創設者鈴木弼美の妻であり，また，自身も学園で数学を教えていた鈴木ひろは広島の出身で，それ故に「ひろ」と名づけられたそうであるが，1928年に東京女子高等師範学校理科（現お茶の水女子大学）を卒業した後，故郷の広島へ戻って高等女学校の教諭をしていた（『基督教独立学園年表』p.6，p.9）。ひろが1929年から勤務していた学校の生徒が，奥田と，もう１名，奥田よりも先に，遅くとも1948年には独立学園の職員を勤めることになる梶岡光子である。

奥田は戦後，母校である高等女学校の何名もの先生に手紙を出したということであるが，そのうち唯一返事が来たのがひろだったということである。そのような縁があり，奥田は上記のように学園で勤務を始めた。

学園の創設者鈴木弼美は，東京帝国大学理学部物理学科を卒業し，学園では物理を教えていた。東京帝大在学時から内村鑑三の聖書研究会に出席するようになり，矢内原忠雄を中心につくられた帝大聖書研究会では書記役を務めている（『年表』p.7，p.8）。帝大理学部助手を勤めた後，1934年９月の基督教独立学校創立の際に校長となった。戦時下の1944年６月には治安維持法違反容疑で検挙され収監されるが，翌年２月に釈放されて雪の中を帰村する。同年８月15日の敗戦の日には，山形県警察の特別高等警察（特高）の２人の署員が鈴木弼美を訪ね，広島，長崎の新型爆弾（原子爆弾）のことや，これからの世の中のことを質問したということである（『年表』p.16）。

独立学園は既述のとおり，全寮制のキリスト教の高校であり，朝拝や夕拝の時間に当番の教師や生徒が30分ほどの講話をすることになっている。奥田はそのような機会に広島での経験を語るようになり，それがきっかけとなって，次節で詳述するように，著書や２冊の絵本の出版が実現していく。奥田は，淡々と，メモを読み上げるような形で語っていたという。他の話者のように聴き手の関心を引くような語りかけから始めるのではなく，前置きなく語り始めるのが常だったそうである。

詳細については次節で述べるが，奥田に本の出版を提案し，原稿をワープロで打ち直した真壁氏は児童文学者である。そのような縁もあり，学園は，真壁の娘が入学した1977年の11月に，童話作家のいぬいとみこを招いて「ヒロシマのピカドン体験」の話の講演会を行っている。

いぬい自身，山口県柳井町で，広島原爆の閃光を見ており，その体験は，『川とノリオ』（理論社，1982年），『光の消えた日』（岩波書店，1987年）などの作品に反映されている。『光の消えた日』の「おわりに」には，謝辞として，佐伯敏子らと共に奥田の名前も並んでおり，それらの著書は，いずれも出版直後にいぬいから奥田宛てに贈呈されていて，今なお学園の「おく

だ文庫」のコレクションの中に入っている。「おくだ文庫」には，この他にも，多くの寄贈書があり，児童文学関係者や，先述の眞壁氏，学園の関係者らから贈られたことや贈られた日付が奥田自身の手によって丁寧に記してあり，「おくだ文庫」の押印がある。

いぬいの短編集『川とノリオ』に収められている「キノコの町」は，ナマズを主人公とする物語であり，水爆の誤爆発でキノコだらけになった町で，ナマズは仲の良かった３歳ぐらいの女の子を待ち続けるが，ある日，いつもその子がいた井戸のへりにまっ赤なキノコを見つける。いつも女の子がつけていた赤いリボンの色とそっくりの小さなかさのキノコである。核爆弾やその放射能の影響によって命を奪われた赤いリボンの女の子の物語は，奥田の『ルミちゃん』を想起させる。いぬいは，第五福龍丸が被曝した1954年３月１日から間もない同年５月２日に早くも，水爆実験の影響をテーマにした短編童話「トビウオのぼうやはびょうきです」を発表した人物である。

⑵　絵本の出版に至るいきさつ

奥田の著書が発行されるに当たっては，教師の語りを受け止めた一人の生徒の家庭での会話が，数冊の本の出版に至る，いわば社会的な営みにつながる波紋を広げていくのである。

奥田の２冊の絵本のエピソードが収められている書籍の最初の版は，1979年４月に自費出版された『ほのぐらい灯心を消すことなく』（以下，『ほのぐらい』）であるが，それが出版されたいきさつについて，学園でお話を伺い，さらに，奥田の証言を本にすることを提案し実現に結びつけた真壁伍郎氏がＡ４版で１枚にしたためた「出版のいきさつ」という文書を貸していただいた。その後，真壁氏が住む新潟でより詳しい話を伺った。

新潟では，真壁氏と，学園で奥田の話を聴いて家庭で話題にした真壁氏の娘，その同級生，真壁氏の妻の四名に集まっていただいてお話を伺った。

「出版のいきさつ」によれば，真壁氏の娘が，奥田先生の話を学校で聴いた時の感動を「（奥田先生は）すごいんだから」と帰省時に語ったことが最初のきっかけであった。当時高校生だったその娘はその時の会話を今ではあまり覚えていないということだったが，真壁氏の妻は，「単に奥田先生が原爆の直後の広島で見て，それを語った内容がすごいというのではなくて，そこでの奥田先生の行動がすごい」，という感動を伝えていた，と振り返った。

私は新潟に行く半月前に広島へ行き，被爆した建物が資料館になっていて，様々な展示が行われている「旧日本銀行広島支店」を訪れていた。その時は，その銀行がある「鯉城通り」の惨状を描いた原爆の絵が集められた展覧会が行われていたが，その絵や書き込まれている言葉を見ながら奥田のことを思い出し，たくさんの子どもたちが「助けてー，」「おかあさーん，」と叫ぶ中で，その言葉に応答し，見知らぬ子どもたちに関わっていった奥田に対して，どうしてそんなことができたのだろう，と驚きの気持ちを新たにしていた。

真壁氏の娘が「すごい」と感じたことは，私が感じた驚きと全く同じものではなかったかも知れないが，真壁氏も「出版のいきさつ」の中で，「原爆だけでなく，戦争の悲惨を語る本はい

くらでもあります。でも，その悲惨にどう自分が居合わせたかを語る本はあまりない……，（中略）どう居合わせたか，そして何もできなかったかが，とても大切」であると記している。奥田の「居合わせ方」に私も感銘を覚えるのである。ちなみに，ここで書かれている「何もできなかった」ということについては，本当にそうだったのかどうか，本稿の最後にもう少し考えてみることにする。

生徒は家庭で，学校で聴いた内容を話題にし，父は学園を訪れた時に奥田にそのことを話して，奥田から紙箱に入ったノートを借り，自宅で読んで涙にくれた。そして，それを本にすることを奥田に提案して，句読点のない原稿に段落も付けながらワープロで打ち直し，証言集としてまとめたのが『ほのぐらい灯心を消すことなく』である。印刷屋の職人も活字を拾いながら泣いていたという（『新潟日報』2015年８月29日）。題名はイザヤ書の42章に由来し，真壁氏が提案して奥田が同意した。題字の筆を揮ったのは，学園で書道を教えていて，1980年代から90年代にかけてテレビ番組にもなり，『100さいのおばあちゃん先生』（岩崎京子作，くもん出版，1994年）として有名になった桝本楳子である[1]。

『ほのぐらい』は，初めは自費出版で500部を自費出版して500円で1979年４月に販売したがすぐになくなり，６月には第２版が出され，11月にはキリスト新聞社から第３版，さらに，奥田が最期を迎えようとしていた2011年７月に第４版が出されることとなる。

その手記を，学園の近くに釣りに来ていてたまたま学園に立ち寄ったテレビ局のディレクター佐々木征夫氏が目にして，その内容をテレビ番組にまとめて1982年８月８日に放映した。その番組の構成がテレビ紙芝居という方法だったことから，それをきっかけに２冊の絵本が出版された。このテレビ紙芝居のために描いた絵本画家が，２冊の絵本の絵を担当することになるのである。学園に伺った時に，絵本画家の宮本忠夫から奥田に宛てられた，広島や瀬戸内海の島での様々な場面の場所を問い合わせる手紙を見せていただいたが，奥田のこれらの話を絵本化することを強く勧める内容も書かれていた。佐々木氏にもお会いして話を伺ったが，絵本作家としてすでに描いていた作品を見て宮本に依頼することを決め，「石ころ一つまでそのまま正確に再現する」ように要望したという。佐々木氏は，奥田の手記の中から３つほどの作品を選び，テレビ紙芝居の準備をしていたが，限られた放映時間の中で全てを詰め込むことはできなかった。そこで，「待っていた兄と妹」（絵本での題は『ケイコちゃんごめんね』）の物語のみをテレビで放映することにした。しかし，他に準備していた『ルミちゃんの赤いリボン』もそのままにしておくのはもったいないと考え，その２つを絵本として出版するようにしたということである。

佐々木氏は，この手記を映像化する際に，当時はやっていた「再現ドラマ」の形式を取るには，余りにその内容がリアルであり壮烈すぎると悩んだあげくに，同僚にからかわれながらもテレビ紙芝居の形式を決行し，その結果，大きな反響を呼んだという。私は大学で「教育方法」を論じる時に，報道の手法から学べることを借りてくることもあるが，ここにも，「伝える」方法を巡って，教師ではなく報道のプロフェッショナルの実践から学べることがあって興味深い。

戦争や災害の悲劇を伝える時に，「声高に」訴えようとしがちなところを，冷静になって，日常的な感覚や生活感が含みこまれた状態で説得力をもって伝えることの大切さに関して，佐々木氏には大きく共感を覚えた。

しかし一方で，それを単に方法の問題としてのみ消化してしまうと，本質を見失ってしまうことになる。それらの日常的な感覚や生活感に満たされた表現や観察眼は，奥田の家庭科教師としての生き方，独立学園の教師としての生き方に依るところが大きかったといえるのではないか。一朝一夕には真似できない奥田の佇まいが，静かな説得力を可能にしていると考えられる。

また，学園で英語を教えていたパメラ・ウイルソンが帰国後の2008年に，手記の英訳本を出版[(2)]する際，当時の広島市長秋葉にコメントを要請し，それは諸事情により掲載されなかったものの，市長の目に届いたことによって，その手記は被爆当時の子どもの姿を綴った稀有なものとしてその価値を高く評価されるようになった。秋葉元市長は奥田の書を読んで心を打たれ，なんで知らなかったのかと恥ずかしく思い，多くの人に読んでもらうために復刻版を出さなければと思って，自費でも出したいと考え続けていたという。それが小学館の編集者（今井田光代）の耳に入り，2015年の復刊が実現した（『新潟日報』同上）。タイトルは，『空が，赤く，焼けて―原爆で死にゆく子たちとの８日間―』と改められ，内容が伝わりやすくなった。原爆に関する手記は多く存在するが，子どもの姿を被爆直後にリアルタイムで描写した手記はたいへん珍しいということである[(3)]。

終戦から70年になる2015年には，こうして小学館から復刊が実現した他，８月８日に新潟市内で朗読会が行われて約60人が参加したり，同15日の夕刻，空が赤く染まり始める頃，BSN のラジオ放送で手記の一部が朗読されたりした。（『新潟日報』」同上）

一方，学園の内外でも奥田の手記への反響は様々な形で現れていて，毎年12月23日に行われる「クリスマス祝会」での各学年の劇において，1998年には３年生が，奥田の『ほのぐらい』を原作としてオリジナルの脚本を創って上演している。また，そこからさかのぼり，1985年８月15日には，山形県教育会館において行われた「山形青少年平和フェスティバル」で奥田は広島での原爆体験を講演している。学園の卒業生の証言によれば，表に出て行って話をするようなタイプではないのに，よほど断れない頼まれ方をしたとしか思えないと言われるほど，奥田にとっては，広島の経験を学園で語ったことがきっかけとなって，自身の語りの場が広がっていったと考えられる。

さらに，「ルミちゃん」がどんな景色を見ながら両親の帰りを待っていたのだろうかと思い，2017年９月に，私は，奥田の故郷であり『ルミちゃん』の舞台でもある島の中の小さな村とその港を訪れた。『空が，』の奥田の写真はみかん畑での撮影と思われるということだが，「70数年前にみかん畑の手伝いをしていた」ということが何の手がかりにもならないほど，その土地のブランドのみかんを主要な産業としている村であった。その村に代々住む奥田さんや，昔を知る何人もの人が急きょ集まって下さって，奥田のこの村での足跡の手がかりを探そうとしてい

る私に協力して下さったり，商店の女性だけが奥田の著作のことを村にゆかりがあるものとしてご存知であったが，そのような話題でお話を聴かせていただいたりした。その村の図書館も訪れたが，奥田の本を１冊も所蔵していないことが寂しかった。

３．奥田の絵本の説得力とその意義

奥田の広島での経験がまとめられた著書『空が,』には，11の物語と２編の詩が収められているが，これらの作品を読むうちに，他の広島や長崎での手記とは違う子どもの姿が描かれていることに驚く。それは，他の多くの手記や原爆を扱った作品においては，当時の子どもは軍国少年少女で，原爆投下後も「天皇陛下万歳」を叫んだり，国家や天皇への忠誠を誓ったり，アメリカに対する敵意を表明したりしていることが一般的である（名柄　2008等）のに対して，奥田の作品に出てくる子どもたちの中には，戦争を憎み，戦争をした大人に対して怒り，「負けてもいい，戦争が終わった方が……」（『空が,』p.22，p.110）が最期の言葉になった少年すらいる。この時代の子どもがこのように考え，ましてや，死に際であるとは言え，それを言葉にして表明することができたのだろうか。

原爆で殺された「無辜の」庶民，という言い方がされる。原爆でたくさんの子どもたちが亡くなった。広島での犠牲者では，10代の子どもたちの占める割合が他の世代と比べて最も高かったという[(4)]。その一方で，気にかかることもある。それは，原爆児童文学や原爆絵本を読み進む中で引っ掛かってきたことであるのだが，原爆に遭った子どもたちも，その時代の他の子どもたちと同様に，軍国少女，軍国少年であったということである[(5)]。そのままの考え方で成長していたら，天皇の御名のもとに何のためらいもなく他国に侵略していき，他国民を殺害してしまう，そんな国民になるように学校で教育を受け，また，様々なメディアを通じてそのように煽られていた。

だからといって，その子どもたちに対して，核兵器を使用して残虐な殺し方をしてもいいということには決してならないのではないか。

昨今の北朝鮮についての報道を見ていると，日本のメディアが伝える範囲においては，現在の北朝鮮の状況は戦前の日本と類似しているもののように思える。

本稿では，以下の３つのことについて考察を進めてきた。

１つめは，主に第２章で明らかにしてきたように，奥田は教師であったからこそ，語る場，伝える場が与えられ，出版につながっていったということである。さらに，手記として，その後，絵本として出版されたことにより，不特定多数に伝わっていくことになる。それは，単に教師であったというだけではかなわないことである。

また，今日ではインターネットなどによって容易に情報が発信できるようになって情報が氾濫しているが，この時代にもなお絵本としての出版に意味が見出されるのは，物として人の手

に渡るということと，その過程において，発案者や編集者，画家が，原作者の想いを引き受けつつ，よりよい作品として世の中に出そうという努力が加わるという点ではないだろうか。奥田という教師を追いながら，テレビのディレクターや絵本画家に出会っていったことによって，伝える，教える，という営みが教師による専売特許ではないことを再確認もした。

私がずっと関わってきた教育という仕事において，この仕事だからこそできること，逆に，この仕事に就いているからこそ思うようにできないこと，その葛藤の中でずっと仕事をしてきたように思う。奥田は語りを奨励される職場にあって，経験を語るようになった。『ケイコちゃん』の最後の場面で，奥田は叔父に昼間の出来事を語る。すると叔父は，「自分は戦争に行けなくてよかった」（中略）「もし，戦争に行ってたら，何人も人を殺していたかしれない。そうすればその残された家族を悲しませ苦しませることになるからなァ，そう思うと身ぶるいがする」と言った。学園の地元である叶水の住人であった渡部弥一郎は，学園創立者の鈴木弼美と共に，同じころ平和思想のため治安維持法違反容疑で検挙されていたのであるが，弥一郎の息子良三は，日中戦争の最中に中国で共産軍の捕虜を突き殺せとの上官の命令を拒否した（渡部　2011年）。その渡部良三は1998年５月に学園での講話の講師として招かれている。

そして２つめは，第２章第２節の中盤で言及したのであるが，奥田の表現力や観察眼が，日常的な感覚や生活感に深く根ざしたものであったからこそ静かな説得力を持ちえたということである。これは，「はじめに」の末尾に置いた，「そのように生徒の心を動かしたものが何であったのか」という問いへの暫定的な解答であると思われる。『ケイコちゃん』のクライマックスで，奥田はケイコちゃんの爪がきれいに切ってあるのを見ながら，子どものお母さんのことが目に浮かぶ。「お母さんとお話ししながら，爪を切ってもらったのであろうか。」（中略）「夕焼けが美しい。こんなに悲しいことさえなかったら，平和な今であったら，どんなにいいだろう。こんなにおそろしい，悲しいことがなかったら，きっと，この２人は仲よくお母さんのところに帰ってゆくのだろうと，その姿を想像した。」

私はこの奥田の視点や感覚を受けて，第一次世界大戦を描いたイタリア映画「緑はよみがえる」（エルマンノ・オルミ監督，2014年）を思い起こす。そこには監督の父の戦争体験が描かれている。正義感からイタリア北部の戦場に向かったが，そこでの現実といえば，戦争がなければ動物や植物が穏やかに時を重ねる美しい雪景色の中で，そこが戦場となったがために，その場所で上官の無謀な命令によって無駄に命を落とし，忍び寄る爆音におびえ，生き延びたとしても一生涯消えない心の傷を負う，という映画である。

私はこれらの作品から，声高に訴えるだけではなくて，静かに説得力をもって伝えることを学んだ。

最後の３つめは，戦災や災害の中にも見出される人間の尊厳を表現するということである。

そもそも，戦災と災害を一緒くたに論じることには危険がありすぎるともいえる。しかし，2011年以降，広島や長崎の本を片手に携えながら繰り返し訪れている三陸で聞こえてくる話は，驚くほど広島や長崎での経験や言葉に類似するものがあった。また，個人情報に厳しくなかっ

た時代の広島や長崎の学校での記録を読みながら，本当は，東北の被災地でも同じようなことが起こっているのだろうな，と思い，現地に行って初めて伺えるような話でやはりそうなのかと確認することもある。

2011年の震災で苦境に立たされた地域の人たちのために，世界各国から様々な支援や同情が寄せられた。これだけの大災害に世界の多くの人々も一緒に悲しみ，力になろうとしてくれたことを本当にありがたく思う。しかし，翻って見ると，1923年の関東大震災で多くの死者を出した日本の家屋の特徴を分析して，東京大空襲ではより効率的な都市の破壊の作戦が立てられたという。あまりの非人道性に驚く。

また，犠牲者の多い少ないを数でまとめてしまうことの暴力性は十分に承知しているのであるが，それでもなお，敢えて，もう一度目を向けておきたいことがある。2011年の大震災の犠牲者は死者と行方不明者を合わせて，２万人にも及び，震災関連死を含めると，さらに多くなる。この数字だけでも本当に大きな災害だったことに再び心を痛めるのであるが，広島ではその年のうちに14万人が，長崎では，同じく７万人が亡くなったと言われていて，正確な人数は到底知りえない。また，さらに大きな非難の対象となることを承知で数字を出すが，2011年の津波で大きな犠牲を出した小学校の犠牲者は81名にも及び，今なお裁判が続いている。この悲しい出来事に対して，教育の場で働いてきた者として，息が詰まりそうなほどの思いになるが，長崎の爆心地から500メートルの高台に校舎があった城山国民学校では1400名もの児童が，爆心地を挟んで反対側にある山里小学校では1300名もの児童が，それぞれの自宅やその付近で一瞬にして亡くなったと言われていて，これも正確な人数は分からない。

ここ一世紀の戦争が，どれ程とんでもないもので愚かしいものなのかということについて，私たちは，この時代に生きて2011年を体験した今だからこそ，この数字のもつ重みや哀しみに関して，理解に近づけるのではないか。

2015年にノーベル文学賞を受賞したアレクシエービッチの『チェルノブイリの祈り』には，「この本はチェルノブイリについての本じゃありません。（中略）私の関心をひいたのは事故そのものじゃありません。」「この未知なるもの，謎にふれた人々がどんな気持ちでいたか，なにを感じていたかということです。」（p.29）とある。

また，この本の巻末に「解説」を寄せた広河隆一は，丸木位里・丸木俊夫妻の絵画表現にも言及しながら，「尊厳ある人間の姿」（p.308）を伝えることの尊さを本書に見出している。「もっとも非人間的な時間の描写で見えてくるのが，驚くべきことに人間の尊厳」であるということを指摘している。広島や長崎の語りの中からもそのことは強く感じるし（林1995，p.85，p.44，等），また，2011年以降，岩手や宮城に通い続ける中で，さらに，2017年からは福島にも足を運び始めて様々なお話を伺う中で，特に福島では，その思いを強くする。そこには，必ずしも美談だけではないという意味も含めて，人間の尊厳が表現されているということになるのではないか。

おわりに

2011年の震災の際,「自然の猛威の前に」という言葉を多く聞いた。自然の猛威も畏れるべきものであるが，もはや，ジェット機が飛び，宇宙にロケットが行き，原子力等の巨大なエネルギーが至るところで使われている時代において，その巨大なエネルギーが意図的であれ誤作動であれ，人間の身体に，人間が生活する街に，様々ないのちあふれる自然環境に向けてぶつけられるような事態になるとしたら，いったい何のための文明であり，科学技術なのであろうか。

核の脅威に一喜一憂している今日の世界，そして，ともすると日常の意識から忘れ去りそうになっているが，福島の原発事故の影響が今もこの国の中で続いていてこれからも続いていくという現実，その中にあって，広島や長崎の経験を簡単に分かったり理解できたつもりになったりすることも真摯ではない。しかし，知る努力をあきらめず，そして，何をどう伝え教えていくのか，アクティブラーニング全盛の昨今にあっては，何を学ばせ，何を考えるように導けばよいのか，という言い方がよりふさわしいかも知れないが，教え伝えていく実践を進めていくと共に，広島や長崎，チェルノブイリや福島で経験してきた人間の姿や尊厳に向き合い，我々のあり方についてさらに考えていきたい。

最後に，第２章第２節の，眞壁氏の文書「出版のいきさつ」の中の言葉で，保留にしておいた,「(私たちはそこに居合わせていかに）何もできなかったか」という記述について私見を述べておきたい。

私は，奥田はその状況にあって,「何もできなかった」わけではない，と考えている。第１章の第１節や第３節で紹介した奥田と子どもたちとのやり取りに，私は救いを見出している。命を助けることはできなかったとしても，これほどに悲惨な状況での子どもたちの最期の時に，奥田が寄り添い，笑顔を引き出したのは，まさに救いだったと考える。

私が養護学校で出会ってきた子どもたちの中にも早くに天国に行ってしまった子どもたちがいるが，教育を通して関わってきたことが無駄になってしまったとは考えない。命の灯火が消えてしまいそうな時にも，精一杯に学校や病院で関わり，お互いに心通じ合うひとときを過ごした積み重ねが，その子どもの人生にとっても，自分とその子との関係においても，貴重だったと思える。その場に居合わせた人間がもたらしうる希望，それが，教育における，そして，人間における，希望であると思う。

注

1）楳子の義理の娘に当たり，学園で音楽を教えていた華子（1922年生まれ，43年に楳子の息子である忠雄と結婚）と奥田は特に親しかった。華子と奥田の性格は正反対であったと，華子自身も『光の中に　桝本華子記念文集』（大風印刷，2013年）に収められている「奥田先生お別れの言葉」の冒頭でそう述べているし，２人をよく知る人たちもそのように証言している。

2）パメラ・ウイルソンは，奥田の２冊の絵本が出版された1983年の８月に着任し，翌年６月の20日

間近くにも及ぶ学園恒例の北海道への修学旅行で奥田と共に引率を務めてもいる。ちなみに，奥田は修学旅行の引率に行くことが多かったそうで，68年から93年までの修学旅行のうちのおよそ20回を引率している。また，３年生の初夏に行われる修学旅行では，女子生徒たちは，奥田の被服の授業でそれぞれが制作したセーラー服を着用して出かけていたという。また，経緯は不明であるが，韓国語訳も出されているということである。

３）子ども自身が原爆投下後のほぼ５年後に自らを振り返って作文に綴ったものには，『原爆の子』『原子雲の下に生きて』，『ピカドン』（2000年に広島の己斐小学校のロッカーから発見された作文集『原爆の思い出』を基にして，2003年に講談社から出版された。４歳から６歳の時に原爆を体験した子どもたちが，５年生から６年生の時点で書いた作文集である。）があるが，回想ではなく投下直後に亡くなっていった子どもたちの言葉や姿をメモしたものの公表は稀少である。

４）2015年８月６日にNHKで放送された「原子雲の下で何が起きていたか」参照。

５）『広島の姉妹』は，「原爆児童文学」を特集とする『日本児童文学』1974年８月号のシンポジウム「原爆児童文学をめぐって」において，その文学性を高く評価されたものの，歴史的事実の順序を誤っていること等が批判されていた。しかし，『広島の母たち』，『広島の友』，と続く続編のうち，『広島の友』においては，朝鮮人との交流や軍国少女としての主人公等が自覚的に描かれていて，児童文学における原爆や戦争の描かれ方の進化という観点からたいへん興味深い。

参考文献

いぬいとみこ（1978）『光の消えた日』岩波書店。
いぬいとみこ（1982）『川とノリオ』理論社。
奥田貞子（1979）『ほのぐらい灯心を消すことなく』オリオン印刷。
奥田貞子（1983）『ルミちゃんの赤いリボン　一つだけとまったらかえってくるといったのに』宮本忠夫・絵，ポプラ社。
奥田貞子（1983）『ケイコちゃんごめんね』宮本忠夫・絵，ポプラ社。
奥田貞子（2015）『空が，赤く，焼けて―原爆で死にゆく子たちとの８日間―』小学館。
長田新編（1951）『原爆の子―広島の少年少女のうったえ』岩波書店。
川口隆行編（2017）『〈原爆〉を読む文化事典』青弓社。
雁部那由他・津田穂乃果・相澤朱音（2016）『16歳の語り部』ポプラ社。
基督教独立学園高等学校（2002）『基督教独立学園年表　前史1899～1947　学園史1948～2000』基督教独立学園。
己斐小学校（2003）『ピカドン―だれも知らなかった子どもたちの原爆体験記』講談社。
佐々木征夫（1993）『うめ子先生―100歳の高校教師』日本テレビ放送網。
（シンポジウム）赤木由子・新冬二・桜井信夫・根本正義・長谷川潮（1974）「原爆児童文学をめぐって」『日本児童文学』1974年８月号，pp.16-41。
スベトラーナ，アレクシエービッチ（2011）『チェルノブイリの祈り―未来の物語』松本妙子・訳，岩波書店。
永井隆編（1949）『原子雲の下に生きて―長崎の子供らの手記』講談社。
名柄堯（2008）『あの日を，ぼくは忘れない』勉誠出版。
林成郎（1995）『閃光の下から―城山国民学校の被爆記録』，朝日ソノラマ。
山名淳・矢野智司編（2017）『災害と厄災の記憶を伝える―教育学は何ができるのか―』勁草書房。
山本真理子（1979）『広島の姉妹』岩崎書店。

山本真理子（1982）『広島の母たち』岩崎書店。
山本真理子（1995）『広島の友』岩崎書店。
渡部良三（2011）『歌集　小さな抵抗―殺戮を拒んだ日本兵―』岩波書店。